

#### 4. 漁況予報調査研究費

##### 1) 1994年(平成6年)アユ資源調査結果 I

##### —— 成育状況と魚探調査 ——

遠藤 誠・山中 治・井嶋重尾・井出充彦・孝橋賢一・酒井明久

【背景・ねらい】琵琶湖産アユは、琵琶湖漁業において漁獲量・漁獲高ともに第1位の重要魚種であるほかに、全国の河川放流や養殖の種苗としても重要な魚種であり、全国的にも関心の高いものとなっているので、琵琶湖産アユについての各種資源学的調査を過去より継続的に実施している。ここでは1994年アユの成育の状況と魚群探知機を用いて把握した資源状況について示す。

##### 【成果の内容・特徴】

①成育状況：アユ漁期を通して、えり・やなで漁獲されたものを3回/月採集し、その平均をその月の体型とし、漁獲体型を成育状況として表した(図1)。

1994年のえり漁獲アユは、11月の漁期開始直後はほぼ平年並みであったが、その後4月まで成長の停滞が見られ、最も差が大きくなった4月では体長が平年の約74%、体重が平年の約30%でしかなかった。しかし5月以降急速に成長の回復が見られ漁期終了直前の7月にはほぼ平年並みとなった。漁期全体を通しての傾向としては、昨年と同様平年より小型で推移した。

1994年のやな漁獲アユは遡上がやや遅く4月より本格的な漁期となったが、夏季の記録的少雨による河川の渇水により6月までで終了となった。漁獲体型は、えりと同様漁期を通して平年より小型で推移した。

②魚探調査：琵琶湖北湖を30m等深線に沿って一周し、魚群探知機により魚群を計数した。平年の2.5倍の魚群を計数する月があったり、平年をやや下回る月があったりと変動があるものの資源状態としては概ね平年を上回った状況で推移したと考えられた(表1)。産卵期直前の8月のアユ親魚資源は、平年の約1.4倍の176の魚群が計数された他魚探調査コース以外でも多くの魚群が認められ、平年を上回る状況で産卵期を迎えた。しかし、通常魚群が多く見られる河川河口部付近の分布はあまりなく、夏季の記録的少雨による河川渇水の影響が出ているものと考えられた。

【成果の活用面・留意点】アユは近年小型化の傾向にあり、今後餌料生物の量や相、湖水温やアユ資源量との関係を整理していく必要がある。

また、魚探による資源動向については同一年内での計数値の大きな変動に対しての補正について、その要因や補正方法を検討し、より資源量を反映したものとする必要がある。

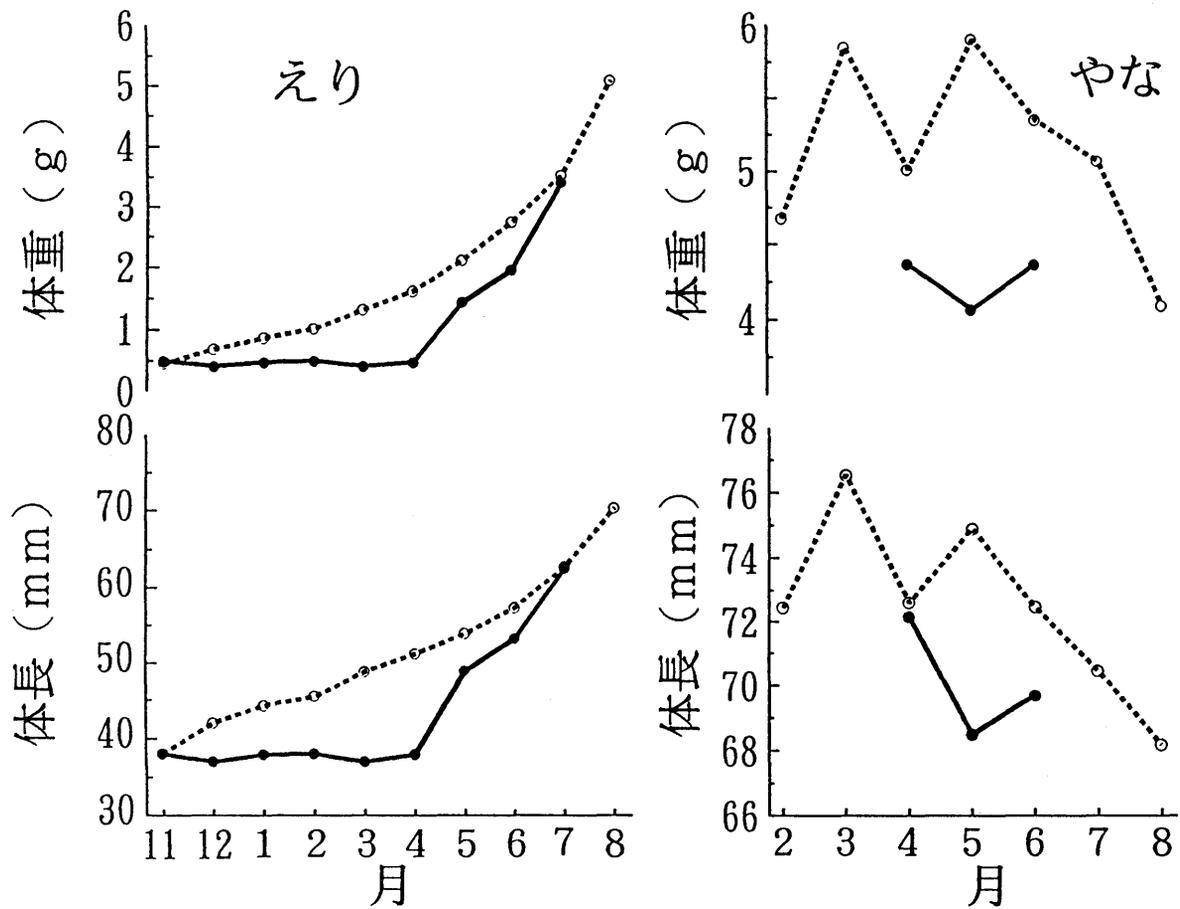


図1 月別漁獲体型の推移

1994年値 —●—  
 平年値 -○-

表1 1994年アユ魚探調査結果

項 目	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
平成6年小群換算値	357	216	184	270	435	618	259	176
平 年 値	140	227	237	312	423	359	125	128
平 年 比	255	95	78	87	103	172	207	138